

2015. 7. 7 (火)

人間と社会の真実を語ることは、 あなたを自由にするか

森 康 俊

圧倒的な平和

私自身、三回目のチャペルで、緊張しておりますが、お役に立てればと思います。

「真理と出会う」というお題で、何を話そうかと考えたのですが、このチャペルにもありますように「真理はあなたたちを自由にする」という社会学部の聖句について考えてみます。皆さんも何度かお話を聞いているかと思えますし、私自身も、いろいろな場面で、これが人間の本質、社会の真実なのではないかと認識したときに、自分自身がとても自由になる感覚というものを、今までに何度か感じたことがあります。ただ、今日は、少し逆説的なお話をさせていただこうかと思います。

それは、真理に出会うことで、自分の内面は確かに自由になるけれども、真理を語ることは、今のこの現実社会では、ともすると、自分自身を不自由にしてしまうような閉塞感があるのではないかということです。特に「物言えば唇寒し秋の風」という松尾芭蕉のことばがあります。他にも似たような、あまり変なこと言うと、たとえ、それが事柄の本質をとらえていても、大人の世界では良くないことがあるということを、皆さんも薄々感じているのではないかと思います。

私たちは、社会学ないしは文科系の学問を勉強しようと思い、大学で学んでいるわけです。そうすると、理系的な真実ではなく、いつも確実に再現できるというようなことではない、社会的な事実というものが、やはりあるのではないかということに気付いていくわけです。今日は、その具体的なトピックとして、やや勇気を振り絞って、戦争や暴力についてのお話をしたいと思います。

皆さんは、いわゆる「平和教育」を受けている人が多く、戦争の非人道的な側面、悪という側面について、たくさんの時間を使い、考えてきているのではないかと思います。しかしながら、最近、歴史統計学などの研究成果を勉強すると、実は、人間というのはそもそも、ものすごく凶暴というか、攻撃性を持っていたことがわかります。紛争やテロが絶えない、今の現代社会は、全く平和ではないというイメージで捉えている人が多いのではないかと思うのですが、研究が示すところによると、実は、現代というのは圧倒的に平和であって、日本はまさにそうですけども、安全に生活しているわけです。人類の歴史の中で、圧倒的な平和が実現しているのです。

年代ごとの死因

日本人が、今、何が原因で死ぬかという「ワースト5」があります。皆さんも想像がつくと思いますが、全ての年齢を通じて、死因の第一位はもちろん「悪性新生物」、つまり、がんです。第二位が「心疾患」、第三位は「脳血管疾患」です。ところで、ここにいる大多数の皆さんの20代～30代の死因は、何だと思いませんか。わかりますか。はい、それは「自殺」です。病気ではありません。二番目が「不慮の事故」です。0歳児では、「先天的な異常」が第一位です。私は48歳ですが、40歳代後半から80歳代後半までは、ずっと「悪性新生物」が第一位です。40歳代後半の第二位はやはり自殺です。皆さんも、自然な形のいわゆる「老衰」理想と思うかもしれませんが、90歳まで生き抜かなければ「老衰」というものは、死亡原因の第五位までには全く出てきません。

何が言いたいかというと、圧倒的な平和が実現している、現代の日本社会において、当然ながらそこには「戦死」というものがないわけです。第二次世界大戦で日本は敗北しました。今年は戦後七十年にあたり、夏にかけて、この話題は、いろいろなメディアで見たり聞いたり読んだりすると思うのですが、第二次世界大戦の「戦死」者は、実は、当時の世界総人口の2～3%ぐらいです。ところが、近代以前は、人類全体の、平均して15～20%が戦争あるいは戦闘行為によって死んでいくものでした。それ以前、記録に残っていない先史時代の死亡も、多くが戦闘あるいは戦争行為によるものだと推測されています。なぜそのようなことが分かるのかというと、骨の解析をして分かります。現在で

も、イスラム国ISが首を切ったりします。皆さんも、とてもおぞましいと感じると思いますけれども、それは、今私たちがとても平和な時代に生きているからであって、人間が他人の首を切る行為というのは、人類史全体を見れば、それほどおかしな行為ともいえないうわけです。

そのようなことは、今の価値観や倫理感、特に日本の場合、先の戦争が終わってから七十年間、教育界と言論界で主導的な立場にあった人たちが重要視した価値観からすると、あまり大っぴらに言うことは、非常にいはばかれます。学者・研究者は、常に時の権力から自由でなければならないと思うのですが、それでも大学に籍を置き、責任のある立場だと、政治家や評論家のように勝手なことはやはり言えないというようなことがあります。戦後七十年間、皆さんは二十年、私は五十年生きてきて、これほど平和で、安定的な社会で暮らしていることは奇跡的なことです。では、この平和がいったい誰によって維持されているのかということをおぼろげにはいられません。

誰が平和を築いているか

最近、声高に「平和が何よりも大事だ」とか「子どもの命が大事だ」と主張する人が、実際はどこまで、たくさんいるかは分かりませんが、頻りに報道されます。こうした主張をする人を、ある種の「平和主義者」と括らせてもらおうと、そうした運動なり、考え方が、實際上、この圧倒的な平和を形作り、維持してきえるのかということ、私自身は、間接的あるいは反作用的に、寄与したという部分が一部あることは認めますが、現実的には、そ

うした人たちが一顧だにしない公務員、つまり、治安や安全保障に関わる仕事をしている人々によって、この圧倒的な平和が維持されているというのが真実なのではないでしょうか。

私は、緊急時の情報伝達なども研究していますので、鉄道会社や航空会社の人たちと意見交換をしたり、お話を聞いたり、現場を見たりすることがあります。本当に世の中に役立ったかどうか分かりませんが、例えば、新幹線など重大な鉄道事故が起こったときに、どのようなアナウンスをしていけばいいかとかを考えたりしてきました。また、飛行機に乗ると分かると思いますが、「揺れましても安全性には影響はありません」というアナウンスをします。搭乗者の不安を解消する狙いがあるからです。

日本の平和、周辺地域の安定というのは、現実には、平和を求める思いや気持ちではなく、現実的に貢献する人たちが、はっきり言えば、自衛隊の若い隊員によって維持されているのです。皆さんの中にも、夏休みに沖縄に旅行する人がいるのではないかと思います。南西諸島の空域・海域で、ソノブイという対潜音響搜索装置に、24時間交代で、わずかな波長の変化を逃すまいと注意している。皆さんとほぼ同じ年齢の海上自衛官がいるということがイメージできるでしょうか。私は、数年前、ある護衛艦に乗艦されてもらったことがあります。一部垣間見ることができた任務の一旦から、伊丹や関空から那覇までの民間航空路をいかに守られているのかを実際に感じることができました。メディアからは、そうした人々の仕事が私たちの現実の生活にどれほど貢献していることは、あまり伝えられません。エンターテインメントのド

ラマや映画は別として、報道番組では、どうしても好戦的なイメージで表現されることが多くなってしまいます。

暴力や戦争の本質を理解するというのは、なかなか難しい問題です。人類全体として、遺伝子レベルで考察すると、誰でも、時々ものすごく怒りというものを覚えることがあります。皆さんもそうだと思います。それを、いろいろな仕方でも制御してきたのが、歴史なのではないかと思います。信仰というのも、その一つだと思います。ただ、信仰も、うまくいく場合、ポジティブな面もあるのですが、逆に、敵を憎む気持ちを増強する可能性があります。チャペルで、このようなことを言うのも勇気が要るわけですが、これは特定の宗教に限らず、どのような思想にも、この要素があると思います。思想があるから人を殺せるわけです。

ただ、そのような中で「話し合いで解決しましょう」、「外交努力を継続し、開戦は避けましょう」ということばが教科書やニュースなどで踊るわけです。そうは言っても、戦闘行為や暴力行為は少なくともはなりません。しかし、今日、最初にお話している通り、ものすごく長い時間で見れば、圧倒的に減ってきているのが事実です。

さて、皆さんがどう考えるかなのですが、人類というのは道具を発明して、この文明を築いたわけです。皆さんが持っているイメージ、人類というのは、そもそもはすごく優しく平和で、それが文明化して、国家ができて、戦争が起こったという流れがあるかもしれませんが、今日、私が紹介した歴史学が見いだしたことは、逆です。人類は、そもそもすごく野蛮で、凶暴で、その攻撃性をだんだん抑制するためにいろいろな工夫をしてきまし

た。実は、国家をつくるということもその一つです。国家が暴力的なのではなく、暴力を抑止するために国家があるのです。皆さんは逆のイメージをもっていないですか。そこにも真実はありますが、このように、人類の原初的な凶暴性を抑制して、ヒトは今の歴史を築いてきたという、逆の見方もできるのではないかという気がします。秩序をどう形成し、維持するかということです。東アジアでは、中国のような、ヨーロッパの視点で見れば、専制国家と思われそうですが、その評価は別として、政治システムが一定の秩序を維持している事実があるわけです。西欧においては、その方法が、近代国家という主権国家であり、民主主義と法の支配というものであったということなのです。あくまで、システムの違いです。

パレーシア

今日のお話で言いたかったことは、真理というものは、出会うとたしかに自分を自由にするのですが、それを語るときには、大人になればなるほど慎重にならなければならないということです。松尾芭蕉が言ったように「物言えば唇寒し秋の風」とならないように、議論や話し合いをしなければならぬということを最近特に感じます。また「雉（キジ）も鳴かすば撃たれまい」など、同じような表現が他にもあります。

最後に一つ、話の準備で見つけたことを紹介します。「真理はあなたたちを自由にする」という社会学部の聖句は、日本のある有名な機関で同じく玄関に掲げています。どこか分かりますか。国会図書館です。国会図書館は昭和23年に立法に資するために造られたわ

けですが、初代館長の金森徳次郎が同じ言葉を掲げたそうです。

このチャペルの聖句は、前の社会学部棟が1960年9月にできた時に、経済学部の東先生が書かれたものだそうです。

話をまとめます。「真理に出会う」というのは、たしかに自分を自由にするけれども、それを語るためにやや勇気が要るような社会というのは、少ししんどいところがあります。しかし、自分自身の探究心とか、世の中のことを理解したいという気持ちがあれば、勇気を持って人と話すことができるのではないかと思います。古典ギリシャ語で、それを「パレーシア」といいます。「パレーシア」とは、何ごととも包み隠さず話すことです。「言論の自由」ということではなく、現代風に言うところ、リスクが伴うというか、勇気が要る、もしかしたら自分が本当のことを言うことで自分の身が危うくなるというような意味です。こういうことが最近は何となくあるのではないかと感じるわけです。

私たちは、理科系的な事実とは異なる人間と社会についての事実を、それも、できるだけ確かなことを見つけていきたいのです。しかし、その真実を知ってしまうと、社会の中では、その時々々の規範や、ムードによって、大っぴらに議論できない危険もあるのではないかというようなことをお話ししたかったので、この話が「パレーシア」になっているかどうかは分かりませんが、春学期、最終週のチャペルでお話しさせてもらう機会を与えてくださいました打樋先生、学部長の荻野先生、そして、中道先生にお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

(社会学部教授)